



Title	ニーチェにおけるパースペクティブの地平構造
Author(s)	永井, 俊哉
Citation	一橋論叢, 109(2): 287-301
Issue Date	1993-02-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/12346
Right	

ニーチェにおけるパースペクティヴの地平構造

永井俊哉

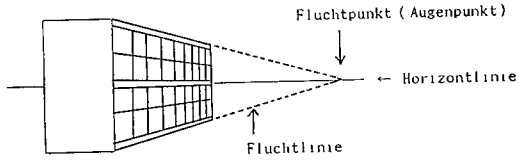
《パースペクティヴ》や《地平》は、人間の視覚器官が身体的に制約されることを通して現出する視界についての概念であるが、ヨーロッパ言語においては視覚についての用語が思考についての用語に転用されるので、これらの概念を考察することは我々の認識のありかたに何らかの解明の光を投じるものと思われる。現代における代表的な哲学である現象学もパースペクティヴ的に立ち現れる現象が地平構造を持つことを剔抉している。小稿では、かかる現象学の知見に基づいて、パースペクティヴ論の古典であるニーチェのパースペクティヴィズムを検討しつつ、彼がパースペクティヴの地平を対自化しなかったことの問題点を考察する。

ニーチェのパースペクティヴ論にはライブニッツのパースペクティヴ論が先行するが、前者を後者と対比することによって前者の射程を明かにすることができる。だがニーチェのパースペクティヴィズムは地平論として深められなければならない。⁽¹⁾

第一節 パースペクティヴと地平

パースペクティヴとは、地平線上の消失点（眼点）から発現する消失線にしたがって、近くのものや遠くのものより大きく描く遠近法のことである（図1参照）。遠近画法はルネサンス以降絵画の世界で盛んとなるのだが、哲学でもライブニッツが人間の認識のバ

図1 Perspektive und Horizont



な実体すなわちモナドとは「宇宙を写し出す永遠の生きた鏡」⁽³⁾であるが、もしも一つしかない宇宙を同じように写し出すのなら、ライブニッツの不可識別者同一の原理にしたがって、モナドは一つしかないことになる。だがライブニッツが認識のパースペクティヴ性を主張しているのは、このような不都合を回避するため

パースペクティヴ性を説くようになる。「同じ町でも異なった方向から眺めると、全く別な町に見えて、ちょうどそのパースペクティヴの数だけ町の数があるようなものであるが、同様に、単一な実体「モナド」の無限の数を考えると、同じ数だけの異なった宇宙が存在していることになる。しかしそれは、ただ一つしかない宇宙を各モナドのそれぞれの視点から眺めた際にそこに生ずるさまざまなパースペクティヴにはかならない」⁽²⁾。単一

というよりも、全ての可能的パースペクティヴを持つ(フッサール流に言えば、可能的諸射映を通して事物の十全的所与性を直観する) 神の完全性を示すためであったのであろう。ライブニッツは、可能的諸世界の全体が「人間の学説の地平、l'horizon de la doctrine humane」⁽⁴⁾(人間の認識の究極的限界)を成すと言うが、人間はその複数の選択肢の中からある特定のパースペクティヴを選び取っておのれを限定する。すなわちひとはおのれのパースペクティヴを語る」ことを通しておのれの地平を「示す」。

地平(Horizont)とは、地(水)平線を考えてみれば理解できるように、視界を遮る視覚の限界線(これは、たとえ大地が球面でなくて平面であっても、なおかつ生じるところの極限值である)によって区画される、つまり認識不可能性によって指示される認識可能性の領野である。もちろん所謂「地平」がなくてもパースペクティヴが生じると考えられるかもしれない。例えば宇宙空間に放り出された時、そこには私はその上に立つべき大地(地盤 Boden)はないが、天体は遠

くに行くにしたがって小さく見えるようになるというパースペクティブは存在するというわけである。だが、遠くに行くにつれて小さくなる天体がその極限としての0(つまり点)となる消失点も存在するのであって、そのような視界が必ずある限り、パースペクティブは地盤を必要としないにしても、地平を必ず必要とする⁽⁵⁾と判断することができる。

もう一度前の図に戻って、パースペクティブと地平の關係を見よう。この視界において最も遠くにあるはずの地平線とそこにある消失点は、実は最も近くにある、いやむしろ私そのものであると言えなくはないであろうか。この視界は、消失点を中心点としてそこからパースペクティブ的に発現して、いわばこの消失点が世界の開けとして視界をその根底において可能ならしめているという意味で、その消失点(および地平線)はこの視界の基体であると考えられる。そして基体としてのsubjectumは、同時に主体としてのsubjectumである。現にもし視覚が主体的に身体的に制限されていなければ、視界のパースペクティブ

は生じないであろう。かつてカントは、それ自体で成立する客観の認識を規定するという超越論的実在論から主観認識が客観を規定するとする超越論的観念論へとコペルニクスの転回を行ったが、我々もまたパースペクティブのコペルニクスの転回を遂行することになる。すなわちパースペクティブとは、客観に備わった自体的性質ではなく、主観の布置的特殊性を客観へと“投射”したものであるということになる。蓋し客観の彼方にあるはずの消失点(Fluchtpunkt)が眼点(Angerpunkt)とも呼ばれる所以である⁽⁶⁾。

神ではなく自我を世界の中心に据えるルネサンス以来の近代哲学の精神を、文字通り「絵に書いたような」この遠近法に対して、現在の画家が反遠近法的な(あるいは一般的に言って反幾何合理的な)抽象絵画の画法を試みたことは首肯しうる。哲学の世界でも絵画の世界と似たような脱合理主義が起きているのであるが、ライブニッツはともかくとしても、ニーチェの⁽⁶⁾ような近代的合理主義に真っ向から対決し、現在ポストモダンの立場から再評価されている哲学者が、一見

近代精神の具現と見えるパースペクティヴを自分の哲学の中に取り入れたことは不可解に見える。しかしそれは、自分の目に映ずるがままに描写することが「客観的」である絵画とたんなる現象を超越することが客観的を意味する哲学との相違から生じてくる見かけだけの違和感である。以下ニーチェがパースペクティヴをどのように哲学したかを見ていくことにしよう。

第二節 ニーチェのパースペクティヴィズム

ニーチェによれば、価値(意味)は人間を超越したイデアールな存在者ではなく、「人間の支配形態を維持高揚するために役立つ特定のパースペクティヴの帰結」(Bd. 15. S. 151.)であり、それが誤って事物の本質に投射され、客観的価値(意味)として私念されたに過ぎない。「我々の価値は事物の中へと投げ入れて解積 (hineinterpretieren) される。では意味それ自体は存在するのだろうか。意味は、必ずしもまったくの関係意味／パースペクティヴではないのではなからうか。——全ての意味は権力への意志であり、全

ての関係意味はその中へと解消される」(Bd. 16. S. 92)。パースペクティヴは主観と客観の関係であるという点で関係意味である。そしてパースペクティヴィズムは、意味を権力への意志と関係的(=相対的 relativity) に捉えようとする点で相対主義 (Relativismus) であるのだが、このような相対主義はニヒリズムをもたらさないであろうか。然り。「ニヒリズムの極端な形は、真なる世界は存在しないのであるから、どの信仰・どの信念も必然的に偽であり、その由来が(我々がより狭い、短縮・単純化された世界を常に必要としているかぎり) 我々の内部にあるパースペクティヴ的仮象である、というものであろう」(Bd. 15. S. 153)。「物理学者は、必然的な運動をする・固定的な・どの存在にも等しい原子の体系という彼等なりの様式で「真なる世界」を信じている。[……]だがこの点において彼等は誤っている。彼等が指定するところの原子は、かの意識のパースペクティヴ主義の論理にしたがって推論されるのである」(Bd. 16. SS. 113f)。自然の中に原子があるわけではない。平等主義的な権

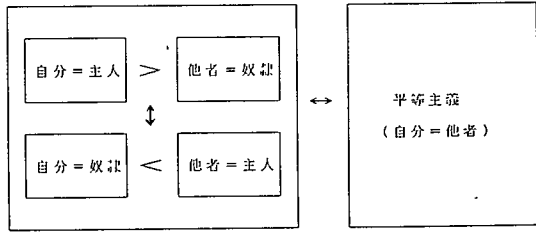
力の意志を持つ者が、自然の中に原子論を読み込むのだ。原子論が提唱された古代ギリシャや近代ヨーロッパの政治形態を想い起すまでもなく、原子論的自然像は民主主義的平等主義による「解釈 Interpretation」であって「原典 [Text]」ではない。だから「同じ自然現象の観察から、まさしく暴虐刻薄で仮借なき権力欲の遂行を読み取ること」(Bd. 7. S. 36.) もできるのである。ニーチェは、己の権力を増大し・全空間を支配しようとする力を人間が生命体のみならず全ての物体に認め、ライブニッツのモナドロジーよろしく、各力の中心 (Kraftzentrum) はそれぞれのパースペクティヴに基づいて残りの全世界を構成(表象)すると考える (Bd. 16. S. 114.)。

地平論にとって重要なことは、自然が他の様にも解釈されうるというように解釈が不確定性の地平において位置付けられていることである。「そもそも // 認識」という言葉が意味を持つかぎり、世界は認識可能である。しかし世界は他の様にも解釈しうる [anders deutbar sein]。世界は自分の背後には意味を持たず、

「自分の中に」無数の意味を持つ。これがパースペクティヴィズムである」(Bd. 16. S. 12)。カントは現象地平の彼方に物自体 (Ding an sich) を想定したが、それは実は不可解な物 (Unding) であった。さらに言うなれば、言語表現の地平の彼方に意味自体 (Sinn an sich) があるわけではなく、それは実はナンセンス (Unsin) なのである。言語的現象界における直か偽か、善か悪か、あれかこれか、なる対立 // 選択 // 問いの地平は、有意味性の地平としてそれ自体無意味性の地平によって地平化され、逆照射されているのである。「それは何か？」は、他なるものから見られた意味措定 [「の問い」] である。「本質」や「本質性」はパースペクティヴ的なものであり、あらかじめ既に数多性を前提している」(Bd. 16. S. 60)。

解釈が他の様でありうるということは、他の解釈すなわち他者が存在するということであり、複数の可能性の中から選択しうるということは当の選択することが選択されうる、つまり可能的他者と権力闘争の状態に入ることである。一見生にとって超越的に見

図2 Die Horizontstruktur des Ressentiments



「せめてもの」創造的行為なのである。この価値付与の眼差しの転回——自己自身へと立ち返らずに外部へと向かうこの必然的な方向——はまさにルサンチマンに属するものである。奴隷道徳は成立するためには、いつもまず対立した外部世界を必要とするのであり、生理学的に言うならば、そもそも行為するためには外

える科学的真理や道徳的理念も、権力への意志のためのイデオロギ—的色彩を免れることはできない。「全ての高貴な道徳が、自己自身への勝ち誇った肯定から生じて来るのに対して、奴隷道徳は始めから「外部」「他者」「自己でないもの」に対して否を言う。そしてこの否が奴隷たちの

的な刺激を必要とするのである。——彼等の行為は根本的に反応「反感」なのである」(Bd. 7 S. 317)。

ルネサンチマンにおいては、奴隷は主人に対して観念的な復讐しかできないのであるが、このことは、奴隷は主人／奴隷の対立地平を前提した上で主人に成ろうとするのではなくて、対立地平そのものを否定する(つまり闘争という対立地平に対して平等という地平を対立させる)ことによって己の地位を相対的に高めようとしていることを意味する(図2参照)。ニーチェが謂う所の「善悪の彼岸 Jenseits von Gut und Böse」はこの図の右側の反対としての左側であって、左側の反対としての右側(善「悪」の彼岸 Jenseits von Gut und Schlecht)ではない(因みにドイツ語の schlecht には、身分の低い・下等な・下品なという意味がある)。

引用文の後半が言うようにこの関係は生理学的な刺激—反応の関係では捉えられないのであって、あくまでも概念的地平論的な参照関係として理解されなければならぬ。この相互参照性から、弱者の道徳が他律

的であるのに対して、強者の連徳は自律的であるといった引用文の主張が崩れることになろう（もっとも生理学的に見ても、主人＝強者の行為が刺激－反応関係から自由であるなどとは言えないのだが）。

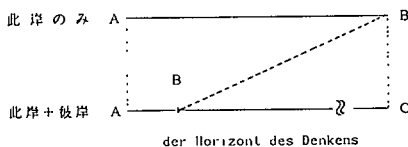
「強者は、弱者が団結しようとするのと同じくらい自然必然的に孤立しようとする」（Bd. 7. S. 451）のであるが、強者の道徳が「高貴」であるためには、その希少性という点からしても少数のものの道徳である必要があり、〈低俗なる多数者〉を概念的に前提しているのである。このように両者を相対させておいた上で、強者＝高貴／弱者＝低俗という価値付け自体がニーチェのエゴイステイックな価値パースペクティヴであって、これと反対の強者＝傲慢／弱者＝謙虚という弱者のエゴイステイックな価値パースペクティヴもそれと等しい権利を持って対立しうる、というように相対化を徹底しておこう。ニーチェは「高貴なる魂は自己への畏敬を持つ」（Bd. 7. S. 267.）と、この意味で「エゴイズムは高貴なる魂の本質に属する」（Bd. 7. S. 251.）と主張するが、同様に「謙虚なる魂」は自己への畏敬を

持つという意味で、相互に団結し合って強者に立ち向かうというエゴイズムは、謙虚なる魂の本質に属すると考えることもできるのである。

このようにパースペクティヴをパースペクティヴとして相対化することはニヒリズムであるし、一見二つのパースペクティヴを対等に扱っているように見えても、実はあくまでも弱者のパースペクティヴであることを免れていない、とニーチェなら再批判するところであろう。此岸を否定して彼岸へと想いを馳せるニヒリズムは、現世の権力に対して禁欲的であることを通して、現世における権力を意志する。蓋し禁欲的「人間は何も欲しないよりはむしろ無を欲する」（Bd. 7. S. 484.）所以である。

この弱者の論理は、思惟の地平の有限性にその根拠を持っている。我々は何を思惟しても、思惟の地平は常に一定である。例えば頭に地球全体を想い浮かべた時、その大きさは目一杯に頭に想い浮かべられた地球の大きさと変わらないし、頭に自分の人生の長さを想い浮かべた時、その長さは目一杯に頭に想い浮かべ

図3 Die Perspektive der christlichen Moral



悩をパースペクティヴ的に縮小化するために他ならぬい(図3参照)。すなわち思惟の地平が現世に限定されていいる時、支配者／富者の権力／財産と被支配者／貧者のそれとの相違(A B)は大きい。しかし今無限万能な神(A C)を想定すると、思惟の地平の有限性からA Cそのものは大きくならないので、A Cが無限大に表象されると、それと相対的にA Bは無限に小さくなる。これがキリスト教が説く所の神の前での平等

られた今日一日の長さとは変わらぬ。そのことは後者が前者の中の部分として表象された時、どれだけ小さくなるかという思考実験をすることによって確かめられる。テレビは画面が一定であるにもかかわらず超マクロ超ミクロをも映像することができ、蓋し人間の思惟もそれと同じなのである。そしてキリスト教徒が彼岸を想定するのは、此岸の長くて大きい苦

である。同様に思惟の地平が現世に限定されている時、権力者にへつらって長生きした者の人生の長さとはキリスト教を信じたために短命に終わったもののそれとの相違(A B)は大きい。しかし今死後魂が無限に持続する(A C)と想定すると、思惟の地平の有限性からA Cそのものは大きくならないので、A Cが無限大に表象されると、それと相対的にA Bは無限に小さくなる。あるいはA Bが誕生から死に至るまでの現世での辛くて長い人生であるとしよう。その辛さは、しかし死後の天国での永遠の浄福を考えればほんの瞬間に過ぎない。これがキリスト教が説く所の魂の不死が意図していた効果である。

この意味でキリスト教のパースペクティヴは弱者の利己主義であると言える。「キリスト教は、無私や愛の教説を前面に出すことによって、個の利害よりも類の利害を価値高く評価してきたのでは断じてない。キリスト教本来の歴史的影響・宿命的影響は、逆にまさしく利己主義を、個人的利己主義を極端に(——個人の不死という極端にまで)上昇せしめたことである」

(Bd. 15 SS. 322 f.)。すなわちキリスト教徒による「人格」の過大な尊大の謀殺が、永遠の人格の信仰を（そして「永遠の救済」についての配慮の信仰を）、人格の利己主義のパラドキシカルな誇張をもたらしたのである」(Bd. 15. S. 264.)。これがキリスト教的パースペクティブの地平構造である。もう一度先に引用した一文を繰り返したい。「奴隷道徳」というパースペクティブは、成立するためには、いつもまず対立した外部世界を「地平として」必要とするのである。

第三節 権力闘争の地平契機としてのパースペクティブ

各人は、有限な存在者として己の地平の内部で、それぞれ自分に都合の良いパースペクティブを通して自己を位置付け・世界を表象している。もしも各人が各人各様の相対主義で満足するならば問題は無い。しかるに人は世界は一つであり、一様であると考える。ここにおいて一つの世界を選択しようとする複数の選択

の間で選択がなされる。これが権力闘争である。もし全ての価値が権力への意志が持つパースペクティブ的な価値であるとするならば、この権力闘争に勝った価値パースペクティブこそが「真の」価値となるはずである。この意味で真理は権力であり権力とは真理であると言える。

古代以来の強者による専制的支配は、中世においては弱者の宗教であるキリスト教によって微温化され、水平化が現世にまで及ぶ近代においてはついに弱者の民主主義的（あるいは社会主義的）支配に取って変わられ、権力エントロピーはさらに増大する。そして民主主義は彼岸の価値を自らの内に宿しているがゆえに多数者によって支持されるのではなくして、多数者の現世的利益に奉仕し、多数者によって支持されるがゆえに価値ありと思念される、ということが暴露されるに至る。この超越的価値／超越的真理の否定こそが、現代においては神は死んだと言われるニヒリズムの事態に他ならない。

「仮象の世界、換言すれば価値にしたがって眺めら

れたある世界。——それは、価値にしたがって、即ちこの場合、ある特定種の動物の保存や権力上昇のための有用性の観点にしたがって秩序付けられ、選択されたある世界のことである。それゆえパースペクティヴ的観点が「仮象性」という性格を与える！パースペクティヴ的観点が除去されてもおある世界が残存するかのように！このことで以ってまさに相対性が除去されてしまうであろう！あらゆる力の中心は残余のもの全部に対して己のパースペクティヴを、言い換

れば己の全く特定の価値評価、己の作用の仕方、己の抵抗の仕方を持っている。それゆえ仮象の世界は、一つの「力の」中心から発するところの、世界へと働きかけるある特殊な作用「権力への意志」の仕方に還元される。「……」しかし、「別の」「真の」本質的な存在は何ら無い。——そのような存在でもって表現されるのは、作用と反作用「権力闘争」無しの世界である。……仮象の世界と真の世界という対立は「世界」と「無」という対立に還元される」(Bd. 16. SS. 66 ff.)。もしこのように現世の権力闘争を肯定するのなら、なぜニーチェはこの闘争に最終的に勝ち抜いた民主主義の価値パースペクティヴに(あるいは同じことであるが、近代自然科学の意味パースペクティヴに)同意しないのであろうか？

実はニーチェは、当時の民主主義的パースペクティヴが末期状態(décadence)にあったことを見抜いていた。E・フロムなどが指摘したように、ニーチェの死後成立するワイマル体制などの現代的な(つまり近代的なそれとは区別された)大衆デモクラシーは、衆愚政治に墮落するや否やファシズムと表裏一体になるのである。「ヨーロッパの民主主義化は同時に専制的支配者を心ならずも育成する。——その専制的支配者という言葉は、最も精神的な意味をも含めたあらゆる意味で理解されなければならない」(Bd. 7. S. 208)。現在の地球的規模で進む経済的合理化に伴って、人類は諸個人を従順で規則正しく動く歯車とする巨大な機械装置になった。「特殊化された有用性への人間のこのような卑小化や順応化とは反対に、逆の運動が、——総合的な・総計する・正当化する人間「超人」の

産出という逆の運動が必要であるが、人間のあの機械化は、この人間が己の高次の存在形式をその上に考案しうる下部構造として、この人間が生存しうるための前提条件なのである」(Bd. 16 SS. 286f.)。

ニーチェの予言通り、ヒットラーに代表されるファシズムの独裁者やスターリンに代表されるコミニズム的独裁者などの「二〇世紀の野蛮人」(Bd. 16. S. 288)が民主主義の水平化の成りの果てに現れたが、戦後のドイツや旧ソ連の周知の情勢を見て分かるように、現時点では(あくまでも現時点においてではあるが)、全体として民主化という人類史の趨勢は変わっていない。しかしたとえそうだとしても、ニーチェの哲学にはなお逃げ路があるように思われる。所謂永遠回帰の理説である。人類の歴史が民主主義の水平化で、強者は弱者の権力支配のもとに引きずり降ろされるとしても、歴史は永遠回帰するので、必然的に強者は再び権力を手にしうる。同様にもしも歴史が永遠回帰するのなら、超人が畜群の大衆を支配しても、超人は必然的に没落することになる。ニーチェが、一方で「人類」

ではなくて超人こそが目標である」(Bd. 16. S. 360)と喝破しつつも、「我々は再生しうるためには滅びることを意欲しなければならない——日一日と。

「……」そして最後に、この系列をもう一度意欲することだ」(Bd. 12. S. 369)と遺稿に記しえた所以である。もし永遠回帰説を受け入れるなら、超人は没落しようがしまいが同じことであるというニヒリズムが帰結する。「意味も目標もなくあるがままの現存在は、しかしながら終末を持つことなく無へと不可避的に回帰する。即ち「永遠回帰」。これはニヒリズムの最も極端な形式である。無(「無意味なもの」)が永遠に！」(Bd. 15. S. 182.)。いったいニーチェはなぜこのような説を唱えたのか？

ニーチェもライブニッツも晩年は不遇であったが、それにもかかわらず・否それゆえに両パースペクティヴ論者は、こうであって他ではない自分の人生に「運命愛 amor fati」を持った。ライブニッツはそのオペティミスティックな予定調和説に基づいてこの世界が最善のものであると信じていたし、ニーチェも永遠回

帰の教説を信じて、自分の人生芝居に対して飽くことなく「もう一度 *da capo*」を連呼したのであった (Bd. 7, S. 80)。ライブニッツのモナドは、ニーチェ謂う所の「力の中心 *Kraftzentrum*」と同様に意欲を持つ力であるが、ライブニッツは、神の完全性を損なわせまいとして、この力としてのモナドに自由意志を認めない。つまり行為は充足理由律によって必然的に成されるのであって、他様ではありえないのである。神の死を宣言し、諸バースペクティヴの背後世界を否定したはずのニーチェも、この点では同じであるかのように見える。「*Es sollte anders sein.*」「*Es soll anders werden.*」という不満から生じてくるところの「倫理学または『望みうることの哲学』」(Bd. 15, S. 381.)に對して、ニーチェはあるがままの世界を、選択することなくディオニソスの「然り」と肯定する。「ある行為を『他の様にもありえたと』非難することは、世界一般を非難することである。……そうだとするならば、さらに非難されるべき世界においては、非難することもまた非難されるべきであらうことになる。……

そして全てを非難する思考様式は、全てを肯定する実践を帰結するだろう。……もしも生成が大いなる輪「永遠回帰」であるならば、どれもが等価値で・永遠で・必然的である。——肯定と否定／選好と愛と憎しみの全ての相関項「の対立地平」においては、たんに一つのバースペクティヴ、特定の生様式の一つの関心が表現されているだけである。それはそれ自体において、あるところのもの全てを・肯定を語る」(Bd. 15, S. 359)。だからニーチェはキリスト教的価値バースペクティヴに憎悪を感じることはあっても、それを非難したり、況んや積極的に當為を説いて弱者に強者となるよう働きかけるなどということはしなかった。

多くのニーチェ解釈家は、「権力への意志」と「永遠回帰の両説をどう両立させるかに苦心する。とはいえ、もしそこで「異なるものへの生成」と「同じものの繰り返し」の間の齟齬が問題となっているのなら、両者の融合は容易である。曰く、異なるものへの生成が、同じように繰り返される！——むしろ多くの人々が感じる違和感は、前者が持っていた意志の自由そして

権力闘争の不確定性とその緊張感が、後者の先まで見通してしまつた悟りの境位(？)において失われてしまつていふことであろう。だがこの疑問は、パースペクティヴの地平構造を対自化する事によつて解かれる。

ニーチェにおける自由と必然の“二律背反”は、行為は必然的に永遠回帰するべく定め決まつてゐるのではなくて、必然的に永遠回帰することを望みうるやうに決断して選択せよと説いてゐると理解することによつて調停されうる。⁽¹⁰⁾ そう理解するならば、行為の決断はどうでもよいどころか極めて重大なものとなるし、永遠回帰を暗示するツァラストラの「意欲は自由にする。これが意志と自由に関する真の教説である」(Bd. 6 S. 125) という説教も理解できる。ひとは己の実存を賭けた真剣な・「こうであつて他ではありえない」決断の瞬間において永遠と接することができる。つまり(再びカント的に言うなれば)永遠回帰の理念は行為の構成的原理ではなく統制的原理なのである。かくして「もはや確実性ではなく不確実性に快感を感じ

ること・もはや“原因と結果”ではなくて常に創造的なもの・もはや保存の意志ではなく権力・もはや“全てはたんに主観的であるに過ぎない！”と謙虚に言うのではなくて、“これもまた私たちの作品——私たちはこのことを誇らう！”と言うこと”(Bd. 16 S. 395)

このことが「永遠回帰の思想に耐えるための手段」(ibid.)となる。まさに「我々のパースペクティヴはたんに主観的であるに過ぎない！」と謙虚に言うのではなくて、“これもまた私たちの作品——私たちはこのことを誇らう！”と自覚することによつて、パースペクティヴ間の権力闘争の地平が開かれる。

ライプニッツは現実の世界を可能的諸世界のうちの一つとして位置付けた。「シーザーはルビコン川を渡つた」といふような現実の世界の出来事は偶然的真理であるが、しかしもし現実の世界が神によつて最高善であるやうに“選択”されているならば、その世界は「こうであつて他ではありえない」必然的な世界であることにならう。ライプニッツが気が付くべきであつたことは、彼が選択した神による必然的な選択の必然

的理論が、それ自体一つのパースペクティヴとして哲学の世界において選択されるべき不確定的理論であるということである。

現代においては神は死に、真に存在する客観的世界は消滅し、存在するのはただ諸々のパースペクティヴだけである。権別への意志というパースペクティヴを持つニーチェは、その永遠回帰説において一見不確定的権力闘争から逃避しているかのように見えるが、実は彼は永遠回帰の覚悟で「他ではありえない」「真剣な決断において、「他の決断ではありえない」・つまり他者には一歩も譲れない直剣な・開かれた対他的権力闘争に己を晒していたのである。そしてそこから《賭け》としての Spiel (Jeu) から《遊戯》としての Spiel (Jeu) が、《獅子の精神》が、モダンな一方向の生成からポストモダンな多種多様な生成が、つまりディオニソスのに舞踏する永遠回帰が生まれて来る。⁽¹²⁾ ニーチェが《権力への意志》で念頭に置いていたのは、他者の支配ではなくて自己の内面の克服であったのだが、それでもそれは自己の内面における他なるものの克服

(自他のパースペクティヴの地平の対自化) でなければならぬ。そしてその克服への努力(それには完結はない)は、おのれの生を正視した《真理への意志》でもあるのだ。

(1) 地平概念の検討に関しては拙稿『地平の哲学』序説(『一橋論叢』一九九二年二月号)を参照してもらえば幸いです。

(2) Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz; herausgegeben von C. I. Gerhart, Berlin 1885, Bd. 6, S. 616.

(3) ibid.

(4) Die Leibniz-Handschriften der königlichen öffentlichen Bibliothek zu Hanover; herausgegeben von E. Bodemann, Hanover 1895, S. 83.

(5) ニーチェも「パースペクティヴを措定する力」が主観である(『Nietzsche's Werke; Alfred Kröner Verlag in Leipzig, Bd. 16, S. 114』)。なお以下の全集からの引用は、本文中に巻数と頁数のみを記して行う。引用文中の「」は、引用者の補足である。

(6) もっともライブニッツも相対性理論を先取りするような関係主義的内包的空間論を展開していたので、彼のパースペクティヴ論も超近代的ニ超ニュートンの

と評せなくもない。

(7) シェーラーが主張するように、もし嫉妬の対象となる人に対して実質的な復讐をすることができらば、ルサンチマンは生じない。(Max Scheler Gesamte Werke, Francke Verlag Bern und München)

(8) 超人は政治的・実地的な「権力」を握らなくても、精神的・内面的な「力」を持てばそれでよいのではないのか、と懐う向きもあろう。現にニーチェがナチズムと結び付けられることによって過小評価されることを恐れる人(例えば独文学系のニーチェ研究者)は、*Wille zur Macht*の「Macht」を「権力」と訳すに「力」と訳そうとする。しかしニーチェの哲学を脱政治化することこそニーチェを過少評価することなのであって、本稿では「Macht」を「権力」・「Kraft」を「力」と訳すことにした。政治的・実地的な「権力」は握っていないが、本当は精神的・内面的な「力」を潜在的には持っているのだ、などと女々しく陰口をたたくことがあるならば、それはルサンチマンとして糾弾されるべき事柄なのである。

(9) 「神の中には、万物の源泉である力 *Puissance* と多相な観念を含んでいる知性と、常に最善を選ぼうとする原理にしたがって変化や生産を引き起こす意志がある。この三つは、創造されたモナドの中にある三つ

のもの、即ち主体 *subiect* つまり基礎と表象の能力と欲求の能力 *la Faculté Appetitive* に対応している」(Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz; Bd. 6, S. 614)。

(10) それゆえハイデガーは「権力への意志」と「永遠回帰」が根底にいて同一であると考える (M. Heidegger; Nietzsche I, Neske 1961, SS. 255-472)。

(11) 自然科学的に永遠回帰説を論証することは、熱力学の第二法則を受け入れるかぎり不可能である。ジンは一方は他方の π 倍の速度で回転する二つの車輪を想定し、 π の本性から言って二つの車輪が同じ状態に戻り、もう一度同じことを繰り返すことが不可能であること論拠に、永遠回帰説に疑問を投げかけている (Georg Simmel; Schopenhauer und Nietzsche, 1907, SS. 250 f. Anm.)。だがこの議論は車輪を永遠に回すエネルギーの供給を前提にしているので、熱の終息による中断を考慮に入れないなら、 π の展開が循環小数にならずに無限に続くという数学的可能的事実を述べているに過ぎなくなるであろう。

(12) Gilles Deleuze, Nietzsche et la Philosophie, P. U. F. 1953. 参照。

(一橋大学大学院博士課程)